

資料集

【資料1】

「禪・念仏・日蓮等の仏教は、何を母胎として産声をあげたのであろうか。日本仏教史上、この場合まず推すべきは日本の中古天台の思想であろう。」(島地大等(1926)「日本天台研究の必要を論ず」『親鸞体系』歴史編1、7頁)

「この思想(中古天台：発表者注)は仏教史の見地からは、かたちの上から顕密融合の思想、質の上からは本覚思想とも名づけられるものであって、天台教学史の立場からは、本門思想とも、事本思想とも云うべきであろう。その他それぞれの立場から、道德絶対の思想、神祇本地の思想、芸術至上主義の思想とも名づけられるであろう。(中略)この根本の思想を究明することが、日本中古天台を検討する所以の眼目であった、将来純粋日本思想史の成立せる場合にはその中心問題となるべきものである。」(同上、16頁)

【資料2】

「親鸞上人の教行証若しくは教行信証は固よりその意義内容を異にすといふと雖も、而も亦是れ恵心流三重相伝より暗示を得たるものなること疑うべからず。その信心正因を一宗の骨目とするは勿論上人が己証の法門なりといふと雖も、中古天台口伝法門の上に現れたる一念信解の思想と甚だ相類似」(島地大等(1931)『天台教学史』、513頁)

【資料3】

「その思想信仰の上から、これ(鎌倉新仏教：発表者注)を大観するときは、所謂一乗思想に立つこと、絶待三学信仰によること、真俗一貫の主張に立ち、あくまで信仰主義を基調とする」(裕慈弘(1948)『日本仏教の展開とその基調』(上)、209-310頁)

「而してそれら四大基調の依ってくる伝統が、直接には、鎌倉諸宗発展の母胎たる比叡山仏教にあり、遠くは聖徳太子の仏教にその源を発することを知らねばならない。」(同上、330頁)

【資料4】

「注意されるべきことは、法然・親鸞・道元・日蓮等の鎌倉新仏教の祖師たちの共通背景として、天台本覚思想が、かんがえられることである。背景の濃淡は、それぞれによって、差異はあるにしても、天台本覚思想は、本来の天台法華思想にくわえて、華嚴・密教・禪など、大乘仏教の代表的思想がとりいれられ、総合開会され、さらにそれらを統一し、究極にまで推進しようとはかったものであり、その意味では、仏教思想の集大成であり、絶頂であるといわれなくもないので、このような天台本覚思想が、鎌倉新仏教の祖師たちの、一度は笈をおうた叡山を中心として、平安末期から、鎌倉・南北・室町、さらに江戸中期にかけて、進展していったもので、これば鎌倉新仏教の祖師たちの思想構成に、何らかの意味において関与し、影響のあったであろうことは想像にかたくないことである。な

おまた、天台本覚思想と比較してみることによって、鎌倉諸師たちの新仏教としての特色が、いっそうはっきりとうきぼりにされるだろうと感じられる。」(田村芳朗(1965)『鎌倉新仏教思想の研究』、はしがき)

【資料5】

「日本の仏教史は、神道・儒教・道教等々から名も知れぬ民間信仰にいたるまでの多様な思想とともに、総合的・統一的に宗教史ないし思想史の一部として再構成されるべきであり、それは各時代の社会構成の性格との関連を示しうる客観的範疇に準拠してこそ可能」(黒田俊雄(1975)『日本中世の国家と宗教』、392頁)

「顕密体制は単なる理念的秩序でもなければ教義上の制度でもなく、独特の社会集団と国家体制とのよって裏付けられた、世俗的実体さえ含む強力な体制であった。」(『黒田俊雄著作集』第2巻「顕密体制論の立場—中世思想史研究の一視点」、292頁)

【資料6】別紙参照

【資料7】

「私が「本覚思想」という場合には、本質的に言って、一切の根底に、一なる「体」や「真如」としての「本覚」を据え、そのうちに一切合切を包含するという構造を示していれば、同一の「本覚思想」と見なしている。(中略) 私が「本覚思想」を規定する際に、他の学者と最も大きく異なる点は、その用語に「天台」という限定語を決して付さないということにある。(中略)「本覚思想」は既に『大乘起信論』において十分確立されていた」(袴谷憲昭(1989)『本覚思想批判』、7頁)

【資料8】

「本覚とは現象世界を超えた根源的覚りのことで、その覚りとは、本来すべての人々に普遍的に具わって常住であるが、それを自覚しない間は現象として変化生滅しているにすぎないという点も含意しておりますので、それは同時に「心常相滅」説をも意味しうる訳です。しかし、この本覚思想を上っ面から眺めますと、すべての人々に普遍的な根源的覚りを認めているが故に、これは即座に平等思想を現していると考えられがちなのですが、現実はいかようにもあれ、それは迷妄であって、真実は一元的な根源的覚りのうちにこそとめなければならぬという、安易で押しつけがましいこの本覚思想こそが、実は差別思想を温存してきた元凶なのだと厳しく反省しなければならない体質を持っていたのであります。(袴谷憲昭(1985)「差別事象を生み出した思想的背景に関する私見」、『駒澤大学仏教学部紀研究紀要』第44号、204頁)

【資料9】

「天台本覚思想とは、単なる理でもなく、たんなる事でもなく、本迹理事等のあらゆる意味での相対思議を、いま一步、その絶頂に、ないしは根底において、突破しようとしたものであり、不二絶対論の究極にまで達したものとして、最高の哲理をふくむといえる。しかし、それゆえに、倫理的・実践的には、問題をひきおこすことになった。すでにみたごとく、鎌倉末から南北・室町にかけて、一般社会の俗化現象にあい応じて、本覚思想における絶対的一元論は、単なる現実肯定となり、俗世・俗事あるいは煩惱こそ実とみなし、頽落するにいたった」(田村芳朗(1965)『鎌倉新仏教思想の研究』、467-468頁)

【資料 10】

「袴谷先生は、本覚思想は「土着思想と合体した場所の思想である」、「自己肯定的な権威主義である」、「知性を軽視した体験主義である」、「体制的な思想である」、「差別思想である」等と言われるわけですが、私はその言われている意味がよく分かりません。(中略)島地大等先生以来の本覚思想研究の土俵で議論している学者、たとえば私などは、本覚思想と聞くと、袴谷先生とは逆に、観念的な知性主義をイメージしてしまいますし、本覚思想を批判した智きも、本質的には言語道断の悟りの体験主義者であると思っています。また、私は本覚思想を差別思想と捉えるのではなく、凡仏不二や依正不二の平等思想の徹底した思想と捉えます。」(花野充道(2003)「本覚思想と本迹思想—本覚思想批判に込めて—」、『駒澤短期大学仏教論集』第9号、6-7頁)

*花野は第19回国際宗教学宗教史会議世界大会で「本覚思想の宗教学的意義」と題して発表を行ったが、以下のような親鸞にかかわる発言をしている。またこれに対して、徳永道雄(2005)「悪人正機と本覚思想」(『真宗研究』第50)では反論がなされている。

「仏教は世界三大宗教のひとつと数えられているが、僧侶の肉食妻帯を容認する現代の日本仏教は、宗教として特異な光彩を放っている。私は、日本仏教がさほど躊躇せず、肉食妻帯に踏み切ったのは、日本で開花した本覚思想が教理のベースにあったことも一員ではないかと思っている。(中略)現代の日本仏教が、僧侶の肉食妻帯にさほど後ろめたさを感じないのは、その教理が本覚思想に基づいているからではないか。あるいは結果的に、その宗教が本覚思想と同じだからではないか。私はとりわけ親鸞の宗教にそのことは言えると思う。」(花野充道(2005)第19回国際宗教学宗教史会議世界大会要旨集、75頁)

【資料 11】

「私はダートゥを否定する無我の立場は、否定するという形でダートゥに関与していることを指摘した。ダートゥが否定されなければならないのは、常にダートゥに向かう必然性が人間の中にあるということである。それを完全に否定すればニヒリズムに陥る。無我や空は、一方でダートゥに安定することを否定するとともに、他方でニヒリズムをも否定する。それゆえに、仏教の無我や空は必然的に極めて不安定な構造を持つことになる。この不安定性こそ仏教が提示する人間存在のあり方である。それゆえ、松本のように単純にダ

一トウを否定するのではなく、ダートウに安定できない不安定性を認めるべきだというのが、私の考えである。」(末木文美士(1998)『鎌倉仏教形成論』、384頁)

【資料 12】

「宗祖に於いて摂取された本覚思想・始覚思想は、決して聖道教諸説のそのままでもなく、十分に浄土教的に咀嚼されたものであることはいうまでもない。この宗祖の持たれている二様の思想傾向は後世の真宗宗学に継承され、宗学史上に現れた二潮流が展開することになる。すなわち如来論について、従果向因・無始無終を説き、衆生論に於いて、弥陀仏性周遍を説く一流は、本覚法門立ての宗学というべく、これに対し、如来論について、従因向果・有始有終を説き、衆生論について、本具仏性を説く一流は、始覚法門立ての宗学と称すべきである。」(普賢大円(1959)「真宗教学と本覚思想—特に仏性論を中心として—」『龍谷大学論集』第361号、1頁)

【資料 13】

「因願に依れば十劫成覚の身となすと雖も、諸仏の寿命平等の果海は欠減あることなし、ただ是れ本覚阿弥陀の寿なり。この義辺に約すれば、酬因感果は是れ始覚の智、無為凝然は是れ本覚の理、理智知不二にして始本是れ一なり。」(存覚『六要鈔』真聖全二、384頁)

【資料 14】

(仏凡一体)

「宿善の開発にもよほされて、仏智より他力の信心を与えたまふゆへに、仏心と凡心ひとつになるところをさして、信心獲得の行者とはいふなり。」(蓮如『御文章』2帖目第9通、真聖全三 438頁)

(機法一体)

「南無の二字は衆生の弥陀をたのむ機のかたなり。また阿弥陀仏の四字はたのむ衆生をたすけたもうかたの法なるがゆえに、これすなわち機法一体の南無阿弥陀仏ともうすところなり。」(蓮如『御文章』4帖目第14通、真聖全三 497頁)

【資料 15】

「この心本より本覚真如の理なり」(『本覚讃釈』、大日本仏教全書 24、322頁)

「真如と我と一つものなり」(『本覚讃』、同上 24、51頁)

「我則ち真如なれば。我仏なり」(『本覚讃』、同上 24、56頁)

【資料 16】

「本覚を本と名くるを破すとは、一には経に違す。経に我本行菩薩道久修業所得我実成仏已来等と云いて、皆修因感果を明かす。二には、譬に違す。もし本覚といはば、何ぞ五百

塵点劫に譬へん。三には論に違す。論に我実成仏已来以て報を仏の菩提と為し、十地満足して常の涅槃を得は本覺にあらざるなり。四には玄文本因本果等に違す。もし是れ本覺といはば非因非果なり」(証真『法華玄義私記』、同上 21・286)

【資料 17】

「この真如觀はし候べき事にて候か。答、これは恵心のと申て候へども、わろき物にて候也。おほかた真如觀をば、われら衆生はえせぬ事にて候ぞ、往生のためにもおもはれぬことにて候へば、無益に候」(『百四十箇条問答』、昭和新修法然上人全集』 648 頁)

【資料 18】

「顯密二教共に談ず、本来本法性、天然自性身と。若し此の如くば、則ち三世の諸仏、甚んぞ更に発心して菩提を求むるや」(『建擲記』、日本仏教全書 16、39 頁)

【資料 19】

「末代の道俗、今世の宗師、自性唯心に沈みて浄土の真証を貶す。定散自心に迷いて金剛の真信に昏し」(親鸞『教行証文類』信卷、真聖全 2、47 頁)